



『呼び覚まされる  
霊性の震災学』  
東北学院大学・金堂清樹  
新耀社 2,200円

### 災後の死の受容を論考する

東日本大震災から三ヵ月は経つた初夏の深夜、タクシードライバーは石巻駅付近で季節外れのコートを買おうと女性を乗せた。行き先は南浜という。「あそこはもうほとんど更地ですけど構いませんか?」そうして南浜まで? コートは着くのですか?と尋ねると、女性は震えた声で「私は死んだのですか?」と応える。ドライバーがミラー越しに後部座席を見ると、そこには誰も居ない。

以上は小説や怪談の粗筋ではない。本書の第一章「死者たちが通う街」を執筆した工藤優花が聞き取り調査で得た、石巻のタクシードライバーの体験談である。これに限らず、パターンは異なるが、被災地のタクシードライバーが幽霊現象を体験した事例は少なくないようだ。

気のせいだろうか。と、覚めた私は正直思う。が、あの信じられない震災を被った地で、こういった現象が起こるのは不思議でない気も心のどこかでする(石巻が、私が幼い頃に住んでいた町だからかもしれない)。津波の死者が霊となり推察する話は『遠野物語』にもあった。詩人・伊藤比呂美の言葉を借りるなら、死者と遭遇したと、信じる心を信じたい。

震災の当事者たちが、震災における死者たちといかに向き合い、それぞれどのような形で死を受け入れようとしてきたかを考察する書である。岩手、宮城、福島でのフィールドワークを通して論考を手がけるのは、東北学院大学教授で災害社会学を専門とする金夢清と、彼のゼミに参加した若い学部生たちだ。

アプローチは多岐にわたっている。石巻の地域性と地元民の心情を鍵に、くだんの幽霊現象の要因を探る。名取市の旧閉上中学校の霊堂碑に、追悼にも教訓にも分類できない独自のメッセージ性を見出す。南三陸町の防災対策庁倉庫保存をめぐる遺族たちの心境変化を、広島の原爆ドームの歴史と照合しつつ追う。山元町

中浜で、遺骨ごと墓地が流された人々の新たな祈りの形態を「幽霊制」という民俗学的見地から浮き上がらせる。

マスメディアの報道では見過ごされがちな人々へのインタビューも印象深い。より不幸な体験ばかりが注目を浴びる隙で社会的に孤立する被災者や、いったんは土葬された遺体を遺族の意思により火葬すべく掘り起こした葬儀業者、震災直後に死の最前線にいた消防団、原発避難区域で有害鳥獣を捕獲し続ける猟師たちの声に、真摯に耳を傾ける。

死者と向き合うに唯一定まった方法などないこと。それでも生き残った者は、各々に向き合い方を手探りし、悲しみを乗り越えようとする。本書が教えてくれる人間の底知れぬ想像力は、かつてのあらゆる被災地で——そして現在の熊本でも、養われ続けているのだろうか。今度石巻を歩くときは、本書を手にも、耳を澄ませたい。

〔評〕佐藤康智

かねびし・きよし 一九七五年生まれ。東北学院大学教養学部地域構想学専攻教授。著書に『震災学入門』など。